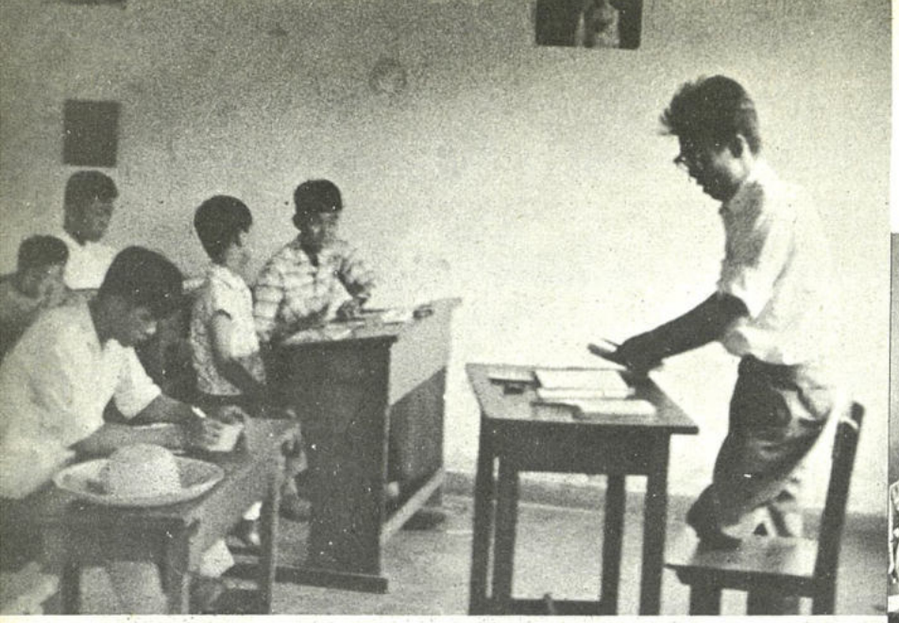
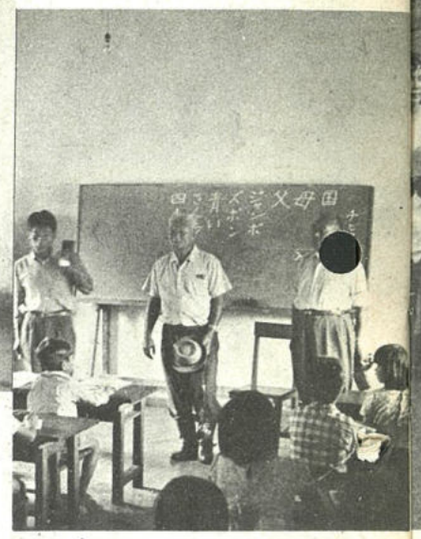


アルトパラナにあるイグアスの小学校では、パラガイ人の一級教師がスペイン語で教育するほか、日本人による日本語の補充教育もやられていた。（写真は、激励する赤城イグアス移住事業所長（中央）と千田知事）



岩手村（アルトパラナ）の面々は、みんな元気な顔をみせていた。

アルトパラナ移住地にある試験農場。肉牛や養蚕が伸びるものと期待されていた。

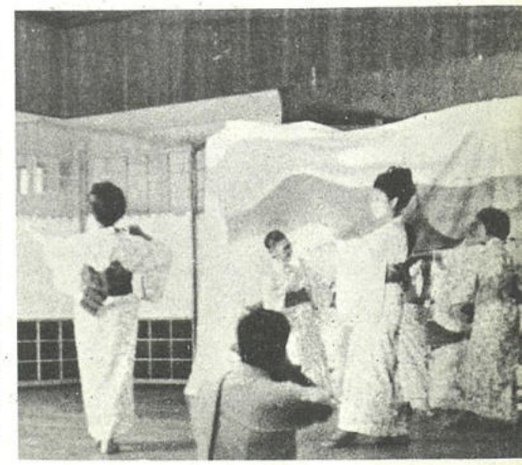
パラガイで空港のタラップを降りたら、玉山村出身の伊藤勇雄さん（元県教育委員）が出迎えにきてくれていた。昨年、南米にわたり、いまでは750ヘクタール経営を確立しているとかで誇らしげな面もち。イグアス村に行ってからの歓迎会では、どこで覚えたのか、本場顔負けの装束としぐさで、剣舞まで踊ってみせてくれた。

アルトパラナの岩手村では、小学生の鼓笛隊が、リズムパレードで歓迎してくれた。千田知事は、「これはみんな、南米に根をおろした岩手の種だナ…」と、目を細めて見とれていた。

二度も激励に来た知事は、岩手のほかにいないと、岩手村では、たいへんな喜びようだった。

アルトパラナの92戸、おくれて入植開始のイグアスに21戸、それぞれ、着実に経営の基盤を固めていた。

作目も、油桐や綿・大豆・トウモロコシにくわえて、年間10回も掃立できる養蚕や、肉牛（セブ種）も有望で、平均500ヘクタール達成も近いと、みんな明るい表情に輝いていた。　（文・写真とも・県農務部長・佐藤寿一）



ブラジル岩手県人会は、創立10周年を郷土の民謡からめ節で楽しんでいた。